



## ■主な内容

2010年第18回総会報告  
2010年総会記念講演「デザインと機能」小記  
特集：人と人をつなぐ仕組み：レースワークを広げるために  
災害復興見守りチーム、法末集落との協働  
ASWA組、公立学校の「トイレをアート空間に」  
同潤会大塚女子アパートメントハウス  
三和町を語り継ぐ  
街イキキキ：えだきん  
ケニア報告2 友好国日本  
第49回海外交流の会報告  
ソウル大会参加申し込みについて  
魅力的なりノバージョン  
巡回展—AWAの設立25周年を祝って  
会員の本「心に響く空間—深呼吸するトイレ」  
UIFA JAPONの新パンフレットとホームページ



UIFA JAPONの新しい顔：左から小川信子名誉会長、松川淳子会長、正宗量子副会長、北本美江子事務局長  
(写真：古村)

## 2010年 第18回総会報告

夏のような強い日差しの下、6月12日（土）UIFA JAPONの第18回総会が開催された。

議長に小川信子会長、書記に安武敦子理事を選出、会員総数86名中、出席32名、委任状提出24名をもって総会は成立した。2009年度の活動報告と会計報告が監査報告を踏まえ承認された後、新役員構成が提案され、8年間会長を務められた小川信子氏の名誉会長就任、会長に松川淳子氏、副会長に正宗量子氏、新しく設けられた事務局長に北本美江子氏の就任が承認された。続いて2010年度の活動計画案と予算案が承認され、閉会となった。

記念講演までの間の、総会会場となった深川の運河沿いの前川製作所本社ビルの見学会は、地域に開かれた、ここちよいコミュニケーション環境の素晴らしさを堪能させてくれた。（在塚）

## 総会記念講演「デザインと機能」小記 ——作る技術と使い手への眼差し

石川和代



松本哲夫講師（写真：古村）

総会に続いて、会場である前川製作所本社ビルの見学会、さらに引き続き記念講演会が行われた。

見学会に先立ち、(株)前川設計の松本氏が新本社ビル建設までの経緯とコンセプトをお話下さり、休日出勤中の社員の方もいらっしゃる社内をくまなく見学させて頂いた。

そして、見学会の興奮も覚めやらぬまま、記念講演会。(株)剣持デザイン研究所所長の松本哲夫講師が「デザインと機能—ヤクルトから新幹線まで」の題で話して下さいました。

ヤクルトの容器デザインでは、牛乳瓶のような誰が見ても判るようなものを作りたいと思ったとのこと。今、あの形を見てヤクルトを思い出さない人はいないだろう。

新幹線のお話では、冒頭に「列車は公共建築物だ」とおっしゃったのが印象的。最先端の700系新幹線では、客車空間の確保と、沿線への騒音、振動の低減のための「空気を後方にスムーズに流して走るか」という命題の両立のためにデザインと空力解析の積み重ねで先端形状が決まっていく過程を豊富なスライドで紹介して下さいました。まるで魔法を見ているようだった。

数々のエピソードは、とてもここで紹介しきれないが、ヤクルトの容器形状を決める時も、新幹線の形状を決める時も「ウンザリする」ほど計算を繰り返し、どうやって作るかを考える頭脳と、「飲み口で子供が怪我をしないように」あくまでも使い手を考える優しい眼差しがあった。だから、ヤクルトも新幹線も、機能を果たそうと人に寄り添うデザインであり、多くの人に愛されるモノ達なのだろう。作り手の矜持と妙味を改めて教えて頂いた一時であった。

## 2010 Annual Meeting

ARIZUKA Reiko

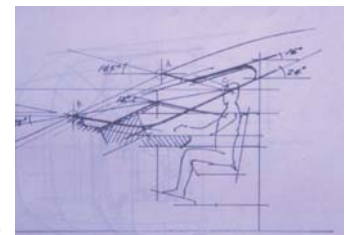
The UIFA Japon annual meeting was held on 12 June, with 32 participants and 24 proxy voters. Attendees heard the 2009 activity report, financial report and audit report, followed by the nominations of new board members. UIFA Japon now welcomes OGAWA Nobuko as the new Honorary President, MATSUKAWA-TSUCHIDA Junko as President, along with other members in new positions. The meeting was concluded with the approval of the 2010 activity schedule and budget draft. The meeting was held in the headquarters of Mayekawa MFG. Co., Ltd., which generously opens its building to the public and supports the Fukagawa community. UIFA Japon is very grateful for their support. (KN)

## Commemorative Lecture by MATSUMOTO Tetsuo:

“Design and Function”

ISHIKAWA Kazuyo

After first hearing about the concept of the headquarters building, off we hurried to the Commemorative Lecture. MATSUMOTO Tetsuo from Kenmochi Design Institute spoke about “Design and Function: From Yakult to Shinkansen.” According to him, the design of the Yakult container was created so that people would recognize it from its shape, and in fact, everyone does. His remarks on the Shinkansen, that “a train is a public building,” is unforgettable. He presented a magic show of intriguing slides, behind the scenes of the making of the Series 700 Shinkansen, with designers trying to increase seating space and decrease the noise and lateral sway: a harmony between design and aerodynamic analyses. Every design requires “endless” calculation, a lot of thinking and a desire to please the user. This is the key to the success of the Yakult and Shinkansen designs. We witnessed a designer’s devotion and the charm of creation. (KN)



新幹線先端形状を決める為の運転席断面検討  
(提供：(株)剣持デザイン研究所)

## 特集趣旨

UIFA JAPON には、有志による「災害復興見守りチーム」「ASWA 組」という二つの社会的活動があります。しかし、その活動の一部が報告されることはあっても、運営や維持の方法はあまり知られていません。今号では、人と人のつながりをつくる仕組みに焦点をあてて、UIFA JAPON 会員の社会的活動の理念と運営方法について特集することにしました。一つ一つの小さな活動が、やがて大きなレースワークとして繋がることを目指して、その仕組みづくりを考えます。(田中)

\*レースワーク：1998年のUIFA日本大会におけるマリア・ダ・シルバさんの発表に啓発されて、編集委員会が2000年のニュースレターから使い始めた言葉。「女性が主体となって行う都市や建築に関わる活動」と定義している。

## UIFA JAPON 災害復興見守りチーム、法末集落との協働 —いつまでも住み続けるために

須永 倅子

2月20日土曜日午後、UIFA JAPON 災害復興見守りチーム主催の講演会が開催された。中越地震の約1年後から、長岡市小国町法末地区に建築の専門家として入り、帰村した43戸の民家の被災住宅カルテを作るなどの活動をしなが、被災後も住み続けるための方策を集落と一緒に考えてきた災害復興見守りチームが、活動の一環として開催したものである。

会場は廃校を利用した法末自然の家「やまびこ」、テーマは「いつまでも住み続ける法末を目指して—法末の家屋」である。(社)住まい・まちづくり担い手支援機構の助成金(平成21年度長期優良住宅等推進環境整備事業)を受けて行った、住宅構造調査の報告講演会だった。法末集落の方々13名だけでなく、新潟の建築士会、新潟大学、東京からも中越震災復興プランニングエイドやUIFA JAPONのメンバー、学生、など34名が参加した。

平成16年10月23日に発生した新潟県中越地震、さらに平成19年7月16日に発生した新潟県中越沖地震と2度も被災した法末集落。総代の大橋泰平氏は最初の挨拶で集落の現状を「35年前には73軒の住宅に200人が住んでいた集落が、現在は人が住む家は40軒しかなく、空家が23軒、人口も80人を切った」と紹介した。

講演会の前半は、2009年9月と11月に東大の藤田香織研究室が実施した、法末集落の住宅構造調査結果を報告するもの。藤田准教授は分かりやすさを心がけた説明を行った。集落内の家屋のうち、大半が江戸末・明治・大正期に建築された茅葺伝統建築という法末の集落。藤田氏は調査した家屋の構造の間取り・断面を基に、耐震性能が建築基準法上数値の5分の1程度と話したが、一瞬会場が沈んだ雰囲気となった。

ほとんどの家屋が行っている屋根を支えるトラス構造を切っ

てまで行われた増改築も、耐震強度に影響している。上階の荷物を降ろし建物を安定させる減災の提案にも「平米当たり1、2トンの雪の重みに耐えてきた建物だから大丈夫と思う」といった住民からの反論も出た。休み時間にも「自分の家はだんだん壊して無くすつもり」と語る。藤田氏が説明した調査報告内容を十分に理解し、重く受け止めている様子だった。

後半は建築や建物診断に関わっている参加者を中心に、質疑の形で行われた。藤田氏からは実験による建物の強度測定について再度説明があり、会場からは伝統建築の場合強度を少しでも基準値に近づけるにしても、完全に倒壊しない数値まで上げることが現実的なのだろうか、古民家・高齢者福祉の視点ではもっとゆるい数値でも認められて助成する地方もあるといった意見、実際に行った耐震診断の指標数値を満たす補修の経験の報告があった。安心して住み続けるためには、防災は重要な要素である。今回の目的は集落の方々に安心して住み続けて欲しいということ。集落の伝統建築を何とか維持するための方策がないかと、皆で知恵を出し合った。

祖先から引き継いだ伝統建築を活かし、住み続けられる方策を探るため、災害復興見守りチームはきめ細かく集落の課題を把握してきた。顔馴染みになった集落の人々への聞き取り調査の中から、朝飯前に総出で建物の普請に関わった歴史があったこと、曳屋も自分達で行えるほどの技術を持っていたことが分かった。途絶えかかった建物を維持するための知恵を継承するため、「伝統的木造住宅の長期的管理モデルの開発—住み続けるための住まいのメンテナンスノート—」を災害復興見守りチームで作成するとのこと。地域との協働作業の中から、住み続けるための知恵とノウハウが少しずつ、蓄積されようとしている。



藤田香織講師 (写真：中野綾子)

## Disaster Area Support Team Collaborates with Hossue Village SUNAGA Yoshiko

UIFA Japon's Disaster Support Team hosted a lecture titled "Houses in Hossue - Continuing to Live" in Nagaoka, Niigata Prefecture on Feb.20, 2010. The team has been supporting Hossue since the Chuetsu Earthquakes in 2006 and 2007. The support includes research on 53 traditional houses that survived, and interviews with the residents. The lecture was selected by the Sumai-Machizukuri support organization as one of the housing and environmental improvement projects of 2009. Attendees were not only Hossue residents but also members of the Architectural Association in Niigata, Niigata University, Chuetsu Disaster Recovery Planning Aid, UIFA JAPON and students from Tokyo.

According to Mr. OHASHI Taihei, the representative, the Hossue area used to have 75 houses with 200 residents in 1985, but only 40 houses with fewer than 80 residents remain now. The first half of the lecture was presented by Prof. FUJITA

Kaori of Tokyo University. She reported on the structural research of houses that was done in September and November of 2009, explaining that most of the thatched roof houses built in the Edo, Meiji and Taisho periods are only one-fifth of the strength required by building code standards. Most of the additions and renovations done by residents were not effective for the reinforcement of these houses. The residents listened to the results of the research with great interest.

The last half of the lecture was devoted to a Q&A session mainly with architects who conduct building diagnoses. Professor Fujita explained the details of building strength tests. Some participants said that they felt it isn't realistic to expect traditional house to satisfy the building codes, since other areas allow lower standards to accommodate senior citizen welfare and preservation aims. Examples of renovation to meet seismic standards were reported. The participants tried to find a way to protect people from disasters while maintaining the traditional architecture of the village. (TA)

## NOTES

TANAKA Atsuko

Some members of UIFA Japon have organized volunteer groups such as the Disaster Support Team and the ASWA Team. Their activities have been often reported in the UIFA Newsletters, however, their organizations and management are unknown. In this issue, we focus on people networks. We hope to foster networks by linking together all these small activities.

## ASWA 組の活動

## —公立学校の「トイレをアート空間に」 井出 幸子

## ASWA 組の活動—公立学校の「トイレをアート空間に」

「学校のトイレを ART な空間に、子ども達に豊かな SPACE を」という提言を元に、UIFA JAPON ASWA 組を主催する中野晶子のトイレとの対話は 45 年前のデトロイトの学校から始まる。ブースに扉がないトイレは恥ずかしかったが、噴水のような手洗いに魅了された。日本に戻り、子育て時代に入って初めて、公立学校のトイレが 30 年前の公衆便所のように殺風景で暗く臭いのたちこめる場所であることを知る。UIFA を通して我が国の公共トイレ革新者の小林純子との出会いがあり、富田玲子らの宮代町笠原小学校の楽しいトイレ空間を知る。さらに、岩崎恵子の協力を得て、「子ども達によるお洒落なトイレ空間作りワークショップ」を横浜で展開することとなった。

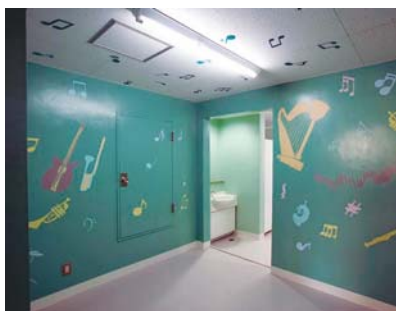
## 芸術家集団「AS 輪組」とのコラボ

横浜芸術家集団の拠点・横浜創造界限 ZAIM の男子トイレ空間に鯨や魚を泳がす装飾をした所、残してほしいという要望をえ

## 実施事例

● 奈良中学校  
「アートミラー」

塗装アーティスト「スクエアアーティスト」がただのニッチだった壁面4面をここにはオレンジ色を塗り、美術部が鏡と硝子タイルで「陽だまり」を表現した。他の階にはグリーンを背景に「森と泉」、もえぎ色を背景に「宇宙-天の川」が出現した。

● 谷本中学校  
「描く音」

アーティストの谷山恭子のステンシル画法の指導で、「描く音」をテーマに、吹奏楽部は音符、美術部は楽器の型紙を作りペイントした。天井も壁も扉も音に満ちた。

た事がきっかけとなり、横浜市文化振興課の後ろ盾で、公立中学校の学校長会議でのプレゼンテーションが可能となった。あわせて、横浜市芸術文化振興財団・UIFA JAPON の助成を受け、芸術家集団「AS 輪組」と ZAIM 在住のアーティストとコラボし、数校の公立中学校でワークショップを行っている。デザインコンセプト、素材提供、制作プロセスのコーディネーションを、AS 輪組が行う。準備段階では、インテリアデザイナーらがガラスモザイク、陶板、鏡など様々な材料の手配を行う。現場では、美術部の生徒達がみずからテーマを考え、手を動かし、バランスよく配置するという完成までのプロセスを ASWA 組と協働する。

## 成果と報告

プロジェクトは、美術部員生徒達の達成感ばかりでなく、利用する生徒達の高感度な感想を得て、新聞の地方版で4回の掲載があり地域の明るい話題となった。中野は、今後、公立中学校のトイレ空間の抱える実際的課題を正視しながら、実施校でのその後の追跡調査を行う。アートによる空間の変容の力と身近なアートワークの意味をどのように評価するか、そのアート空間を更新するためのルールづくりなど、検討して行きたいという。

● あざみ野中学校  
「檜棒立体画像」

諸戸林業から県内産檜を手に入れ、一面のみ斜め加工した計三面に画像をペンキで描き込んだ。デザイナーは楊英美、描き手は美術部。

● 青葉台中学校  
「桜の四季」

ZAIM の塗装アーティストが壁と木製扉をペイントし、美術部が校庭の桜を描き各階に四季を表現した。サインは陶板に絵付けをし美大の窯で焼いた。

写真：岩崎恵子

## ASWA Team – Turning School Restrooms into Art Spaces

IDE Sachiko

With the slogan “Restrooms as Enriched Spaces for Children,” NAKANO Akiko, a member of UIFA Japon, started the ASWA Team a few years ago. Nakano experienced school life in Detroit, Michigan, in the 1960’s and remembered her fascination with the fountain-like washbasin of her primary school restroom. In the 1990’s she found out that the washrooms in Japanese schools were still unpleasant. Right after meeting KOBHASHI Junko, the pioneering architect of public restrooms, and TOMITA Reiko, who designed enjoyable restrooms in Miyashiro Primary School, Nakano began a workshop for children to create fancy school washrooms with the help of IWASAKI Keiko, who spent her childhood in London and San Francisco.

ASWA, or AS as it is now called, opened an office in an old building in Yokohama’s historical district. The ZAIM Building used to house the diplomatic finance office but from 2006-

2010, was home to some 40 artists/groups who had ateliers, studios and offices. AS was assigned to renovate the 4th floor toilet in ZAIM. They painted the ceiling blue like the sea, and hung origami whales and other collages of fish everywhere. Supported by the administrative system, AS made presentations at meetings of school principals and then, subsidized by UIFA Japon and the Yokohama Arts Foundation, they started to collaborate with other ZAIM artists to make fancy washrooms in public junior high schools.

Members of AS create the design concept, prepare materials and organize the process. TANAKA Hideyo coordinates the collection of glass tiles, lumber, paint, mirrors, colorful cutting sheets and other materials, sometimes getting samples or donations from companies. In workshops at each school, the students in the art clubs decide on the theme, make sketches and then arrange the materials in balance, according to AS concepts. AS and the students thus collaborate on each restroom project. (TA+NA)

—紡いだ空間・織りなすドラマ—

同潤会 大塚女子アパートメントハウス

中野 晶子

職業婦人

女工哀史の現実も進行していた1930年に竣工のこの建物は、当時のキャリアウーマンにまで、快適な単身のアパートメントを提供し、屋上の音楽室やサンルームの存在はまさにコートピアの体現ではなかったかと思う。タイピスト、教員、作家、バイオリン教師等、昭和初期のレトロな文化の担い手とその主役で、その生き様が幾筋もたて糸となり、その共用空間は横糸として彼女たちを結んで一つの居住の場を作り出した。設計の意図通り、一階の応接室までしか男性は立ち入れず、上階の廊下の開放感はやるやかなご近所付き合いを可能にしていた。憩いの場は中庭にも広がり、自立した自由人達がのびやかなひとときを過ごしたに違いない。駅近、繁華街に面した1階は商店として独立した平面構成で、街とのつながりもあった。

女性史そのもの

この建物の歴史は、女性の自立への現代史とパラレルであり、同潤会の理想が、戦争とその後の高度経済優先の現実にさらされ、廊下、食堂、浴室などの共用空間は徐々に意味を奪われて行く。契約先（同潤会→住宅営団→戦後の混乱→都）は時代とともに替わったが、自治会票決により分譲取得にはしなかった。1957年の道路拡張では居住者たちの力が情勢を圧倒し、住んだままの曳家が行われた。所得格差にこだわらなかつた人々の結束は、住み手の高齢化と維持管理ノウハウの循環不良のため、次第に往年の力が保てず、ほころびてくる。

なぜ？

振り返れば、他の同潤会アパートと同じ運命となり、「都」の単一所有のためにかえって解体が拙速に行われた。保存活動の推移

Compelling Stories of a Unique Housing Complex from the book "Otsuka Women's Apartment" NAKANO Akiko

This was the first housing complex built especially for working women. Designed under the quasi-governmental Dojunkai organization in 1930, tenants included an author, an educator, a violinist, a secretary and other sophisticated women, and they enjoyed a sunroom and music hall on the top floor. Because men were prohibited except on the 1st floor, the women felt completely safe to cultivate friendships in the corridors and the courtyard. There were shops opening toward the main street that were unconnected to the living quarters.

The building's life runs parallel with the contemporary history of women's independence. During WWII, low supplies of oil and food closed the shared bath and restaurant. In 1957, when the main road outside was extended, a strong union prevented the building's demolition in favor of moving it. But over the years, the residents became older, maintenance was not properly conducted, and time began to take a heavy toll.

は本の中で、単純保存、部分修正、利活用の検討のためのワークショップ、文化庁とのやりとりと順に綴られ、訴訟までのプロセスは急を極め、保存を訴えて来た文化人の悲痛な思いが、がれきの山となっていった。解体の理由は何だったのか？耐震性？耐久性？売却益？「建物の歴史がイコール女性の歩みであったことの証」として保存しようとしたこの一点に、まさか都が過剰反応したのであろうか。破壊した都と創造した同潤会が対比される。

家族から単身への変容

単身者がゆるやかに繋がる都市の住まいのさがけは消えてしまった。昨今は、結婚という単位に収まらない成人が増えている。寂しいが、個は大切にしたい。繋がりたいが、ずっと一緒はいや。この曖昧な現代人の要求を形に納めてくれる建築は、コミュニティーはあるのか？ スウェーデンにおけるコレクティブハウスの先例や、カテゴリーハウスという概念が、編著されたこの本に記され、次代につなげている。集まって住む形も変容しているが、その主役はいつに編み込まれるのか？



同潤会  
大塚女子アパ  
ートメントハウスが語る  
(ドメス出版女性とすまい研究会編)

この本の共著者には、小川信子、小谷部育子、寺本晰子、宮本伸子、渡邊喜代美の5人の会員が名を連ね、それぞれの連携は見事なレースワークをなしている。

Most other Dojunkai dwellers owned their rooms. But in this case the Tokyo Metropolitan Government owned the entire building, and made the quick decision to demolish it. This book traces the move to preserve it, covering the attempts made to halt its destruction, including workshops and direct appeals, as well as an ultimately futile civil suit against the government. No reason was given for the rejection of the group's efforts, although seismic concerns and the building's decrepit state eventually overwhelmed the effort to preserve it as an important slice of women's history.

The iconic example of specified-use housing sadly disappeared. Today's single urban dwellers need their independence but many live lonely lifestyles with no chance of connecting to their neighbors. This book introduces possible solutions, such as housing collectives like those in Sweden. The book's authors include UIFA Japon members OGAWA Nobuko, TERAMOTO Sekiko, KOYABE Ikuko, MIYAMOTO Nobuko and WATANABE Kiyomi, and they weave their wisdom together to create compelling stories.

## 三和町(みつわちょう)を語り継ぐ

## 在塚 礼子

もう15-6年前のことです。いい住宅地について考えたいと思っていた私は、ある小さな住宅地の略図に惹きつけられました。それは、あまり顧みられることのない住宅営団（日本で最初の全国規模の公的住宅供給組織。第2次大戦中の1941年に設立、1945年にGHQにより戦争遂行のための組織として閉鎖された。）の住宅地でした。住民たちが三和町と名づけたその町（現埼玉県蕨市南町の一部）を、私は学生とともに歩き、居住歴のヒヤリングや当初住宅の実測などを通して、たくさんの方々に出会いました。

住宅営団が初年度に計画した三和町には、当時最先端の住宅地計画の理念と技術が盛り込まれていました。配置計画図からは、戦時下にあっても、いい住宅地をつくりたいという、当時の技術者の心意気を感じられます（図参照）。

営団閉鎖後、住宅払い下げ運動と並行して、住民たちの活発なまちづくり活動が始まります。食糧確保のための畑になっていた住区ごとの“緑地”をいち早く子どもの遊び場に開放したのも、250本の桜並木も、公民館の自主建設も、みな住民の力でした。一方、行政も小公園にそれぞれ樹木の名をつけて整備するなど、当初の計画を生かしたまちづくりを支援しました。

番地改正によって三和町が消えるとき、住民たちは自ら町の記録と記憶を本として残しました。その『家中みんなの三和町の歴史』（1982年12月発行）には住教育の視点も盛り込まれていて、今も新鮮です。4年かけた編集と執筆の中心となったのは、当時、隣接中学校の教師だった潮地ルミ先生です。先生はその後郷土研究部の卒業生たちとともに、折に触れて小学校や公民館で三和町を語り、蕨市立図書館の郷土資料室に、関連資料を収集するよう働きかけてられました。

現在も当初の宅地割が姿をとどめ、緑の多い落ち着いたたたずまいを見せる旧三和町地区では、活発な公民館活動が継承され、桜の季節の賑わいも健在ですが、世代交代も進み、三和町を知る住民も少なくなりました。そこで、町の歴史を次世代に語り継ぎ、これからのまちづくりに生かしていくことを目的として、2009年に立ち上げたのが「三和町を語り継ぐ会」です。お世話になった町の人々へのお返しの意味もありました。代表はもちろん潮地先生にお願いしました。

会では歴史講座や思い出を語る会を開き、「三和町だより」を発行し、町の絵本づくり、ガイドツアー・コースづくりに取り組

んでいます。昔からの住民を中心に、埼玉大学旧在塚研究室卒業生や、活動に関心を持つ方々の遠方からの参加もあります。これからも、過去から未来の人々へとつなぐ立体的なレースワークを続けたいものです。

## Transmitting the History of Mitsuwa-cho

ARIZUKA Reiko

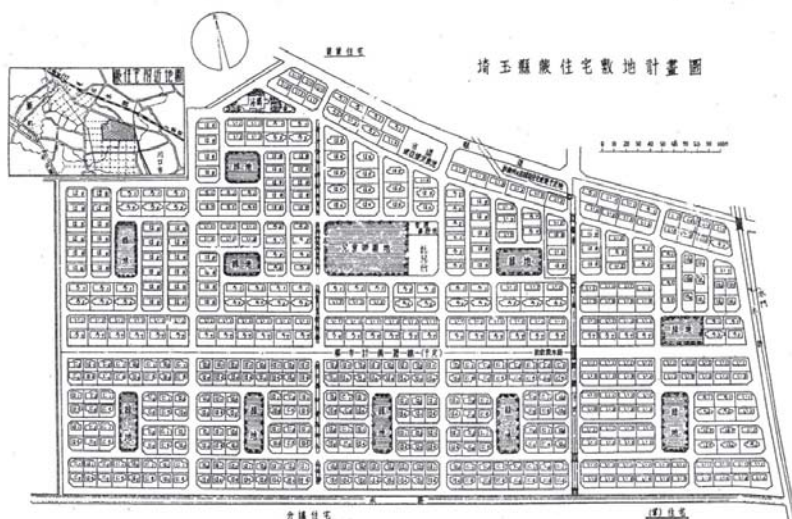
Mitsuwa-cho was a town planned by the Jutaku Eidan (Housing Corporation), which was organized to supply the first nationwide public housing in Japan in 1941, during World War II, and closed in 1945 by the allied forces due to its wartime operations. The spatial arrangement of Mitsuwa-cho shows how the designers wanted to create quality housing, even in wartime.

After the closure of Jutaku Eidan, in parallel with government properties being sold off, the lively town-planning activities of residents started. These activities lead to the redevelopment of "food security" farm plots into children's playgrounds, the planting of 250 cherry trees, and the construction of community centers by residents. The local government supported the community by utilizing the original town planning.

When the Mitsuwa-cho town council was dissolved, the residents created a book with a record of their memories of the town in 1982. The main author was Ms. SHIOCHI Rumi, who used to be a junior high school teacher. She lectured on the history of Mitsuwa-cho at elementary schools and community centers, and collaborated with her pupils and the city's public library to collect materials related to the town.

The area of old Mitsuwa-cho still retains its original form of residential division and a quiet, leafy atmosphere. However, nearly 70 years have passed since the town was born and the residents have changed, so they know little about their own town. Thus, we established a society in October 2009 to transmit the history of the town to the next generation, utilizing collective memory to enrich the future.

The society conducts a history course, lectures and workshops, publishes "Letters from Mitsuwa-cho," creates a picture book of the town, and engages in guided tours. In addition to the residents, participants have been attracted to these activities from far and wide. (KI)



講義中の潮地先生（「三和町だより」より）  
（写真：高橋ゆかり）

配置計画図：880戸ほどの住宅地を11の住区に分け、それぞれに緑地を配し、車の通過交通に配慮して道幅に変化をつけ、形型も取りいれている。託児所を實現しなかったが、ほぼこのとおりに建設された。住宅は過半が2戸建てで、平面型は20種にのぼる。

## 街イキイキ：えだきん

飯田 とわ

会員の吉田洋子理事の案内で伺ったのは、横浜市都筑区のニュータウンにある荏田南近隣センター商店街、通称「えだきん」。吉田さんが仕掛け人となって、街を再活性化した商店街の一つだ。メインストリートには手入れの行きとどいたチューリップやピオラが咲き競い、まず目を引く。幅 10m ほどのこの遊歩道のまんなかに植えられた街路樹（はなみずき）の足下に土を盛り上げた花壇がおおよそ 100 カ所連なる 450 メートルほどの夢の小道だ。

この道に面した商店街の中心には元スーパーの空き店舗を利用した「えだきんパーク」というコミュニティスペースがある。ここでは看板の落下や壁のはがれが生じ、治安も心配と、6 年前に連続ワークショップを開き、利用方法を検討した。現在は商店街が全体を借り受け、介護系会社の特例子会社、ピアサポート株式会社と、NPO アスタ荏田が入っている。ピアサポート株式会社は障害者の社会参加をめざし、パソコンを使った仕事をしている障害者の起業した会社である。またアスタ荏田は障害者の就労訓練及びサポート、お菓子の製造・販売等を行っている。出版・印刷等の業務もっており、地元の小学校や自治体からの依頼を受けている。アスタ荏田はえだきんパークの管理も任されており、「何かやりたい」とやってくる住民の相談にもものっているという多機能な役割を果たしている。

吉田さんおススメのマドレーヌをほおぼり、ここのカフェスペースで一息。元スーパーで広く、全面ガラス張りで開放感もあり、気軽に入ってこられる雰囲気。日中はお母さんたちの交流の場に、放課後は小学生たちの待ち合わせ場所にもなっているようで、休憩している間もいろいろな人が頻りにやってくる。いい意味でちょっと下町的な感じ。「雨が降ってもイベントのできる、みんなの広場ができたのよ」と吉田さん。

そこへ床屋の高橋さんも顔を出した。花・花倶楽部の代表者で、先述の花壇の手入れをボランティアで行っている方だ。メインストリートの花壇は、この「花好き達」が仕事中でも誰かしら花から摘みをしてこの景観を維持している。土木科の学生が土おこしを手伝ったり、地元の人がベンチをつくったり、雨水利用の水やり用樽も 5 カ所みんなの手作りで設置した。

お二人は、「いろんな人が関わりあったからできた」と口を揃える。そして「そういう人たちのご縁をつなぐのが私の仕事かな」と街のオーガナイザー吉田さん。「まちが好きで、花が好き。それで人が集まってくればこんな嬉しいことはないです」と高橋さんの笑顔。えだきんパークは晴れても、雨でも“みんなの居場所”になっている。



「えだきんトライアングル」という月に1度の話し合いの場がある。イベント等、動きがあるときにはそれ以上の頻度で集まることも。(写真：吉田洋子)

## Vivid Promenade: Edakin

IIDA Towa

In the past, there was a new street lined with shops and a supermarket in Yokohama, named Eda. But the city grew quickly over 20 years and these shops lost their popularity. UIFA Japon's YOSHIDA Yoko, a city planner, recently helped return Eda to its past as a vivid promenade.

Around 450m and 10m wide, there are now trees every 5m surrounded by flowerbeds. Every season they are full of vivid flowers very well cared for by inhabitants, except during 2 months when the soil takes a rest.

The renovated supermarket, called Edakin Park is located in the middle of this long street, and is operated by the union storekeepers. Six years ago, local residents and Yoshida held many town meetings to consider how to use this empty space. Now two businesses are operating there: Pia Support trains handicapped people to work and supports their jobs. It also has a small factory and shop for sweets. Asta Eda N.P.O. organizes workshops for printing and publications from the local government and schools, and also takes care of Edakin Park.

Tasting a Madeleine from Pia's shop, we took a break in the cafeteria corner. Wide windows allow everyone to see the promenade. During the day, mothers come to chat, and in the afternoon students drop by to make their connections. "We created an open space for every event, even if it rains," says Mrs. Takahashi, the barbershop owner, with a smile. "I love people and flowers. We can forge relationships and have chances to meet others." She is one of the volunteers who take care of the flowers. They also provided wooden benches and 5 big barrels to keep rainwater for use on the flowers. We all belong to Edakin Park, and no matter what the weather is outside, there's space reserved for us. (NA)

## ケニア報告 2 友好国日本

古村 伸子

その朝、私はナイロビにあるケニア中央銀行のゲートの前で、迎えの人を待っていた。ドロだらけの私を見て「ここになにやってるんだ。あっちに行きなさい。」ゲートにいた男性に言われ、私は隅のほうで待っていたが、なかなか迎えがやってこない。1 時間後、私が日本人だと判明、彼は劇変したにこやかな表情で言った。「Welcome to Kenya! ケニアは民主的で平和な良い国だよ。」ちょっと変だよねと思いつつも、なんだか少し安心したのも事実だった。

その朝、村で午前 4 時にナイロビ直行バスに乗った。雨季の始まり、舗装されていない道路は水流で大きくえぐれる。突然バスがとまり、土と格闘する男の影がライトの中に見える。車掌がスコップ一つで道を修復しているのだ。小一時間後、陥没箇所が修復された。拍手したい思いをこらえ、周囲の乗客にならって寝たふりをする。朝、ナイロビのバスターミナルに到着、ケニア国立銀行のあたりを歩いている時「なれない古村さんが一人で移動するのは危ないので迎えに行きます。そこから動かないでください！」と CanDo の事務局から携帯電話にメッセージが入った。CanDo (キャンドウ：特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会) はケニアで参加型の開発協力の活動を行っている。住民自身が考える「豊かさ」の住民の行動によ

第49回海外交流の会パネルディスカッション  
「韓国の現代文化—若者に聞く」に参加して 東 由美子

韓国を知るための交流会、今回は若者の文化の一端を知ることができた。

韓国では教育に非常に熱心であることはニュースなどで見聞きしていたが、想像以上のものもあった。例えば有名塾のある地域は不動産価格も高くなるという。また塾の周りにはたくさんの喫茶店があり、そこで送迎のお母さんたちが待ち時間をつぶしているようだ。一方、教育費が非常にかかるので女性も仕事することが多くなっているとのことだ。

最近では特に英語教育に力をいれているようだ。男性が兵役についている間、女性は語学留学することも多いという。日本以上に若者には英語を話すことに抵抗感が少ないらしい。UIFAで交流した韓国の方々には英語が通じにくかったことを思うと隔世の感がある。

パソコンの普及も日本を超えている。2,3歳からパソコンで遊び始め、子供や若者の間ではネットゲームもさかんで多くの時間を費やすようだ。パネラーからはネットにはまることによる人間的コミュニケーション力不足に対する危惧が感じられなかったのは少し心配なところである。

水辺のコミュニティー空間についてはソウル中心部のチョンゲチョンが有名だが、郊外にも同様な水辺空間はたくさんあるとのこと。若者はそこで待ち合わせたり、おしゃべりしたりすると聞き、対面コミュニケーションも生きているようで少し安心した。

る達成を目指す。

日本から一步出ると、日本人が国際社会の中でどのように扱われているかが肌迫ってくる。ケニアと日本は友好国である。「日本の国益のために国際協力を積極的に進めるケニア」

「便益をもたらす友好国日本」これは逆にみると金の切れ目が縁の切れ目になってしまうかもしれない。そんな中で、ケニアの村住民を主軸に据えたCanDoの協力事業は、一歩ずつ人々の暮らしを、彼らが考える豊かさに近付ける試みであり、人と人とを繋ぐことを、私は確かに感じた。(82号「ケニア報告1」をご参照ください)



道路脇の灌木を切り払う作業が終わった道路。作業に加わった村人には食糧が配布される。単に食糧を配布するのではなく、雇用の機会を与えている。

49th Intercultural Lecture:  
"The Youth Culture of South Korea" HIGASHI Yumiko

I learned about today's youth culture in South Korea at this lecture. I knew that South Koreans highly value education, but I didn't realize the extent. It is astonishing that the price of land escalates wherever good prep schools locate. Schools devote much time to English. The young people are now able to speak and write English better than before.

PC use has spread all over the country and among all generations. The younger generation spends a lot of time on games. The panelists don't seem to be concerned about the lack of face-to-face communications as a result of this. The redevelopment of Cheong Gye Cheon River is very famous. But there are many rivers like it in the suburbs of Seoul. I am glad to know that young people often get together there.



コーディネーターと発表者 2010年3月6日開催

(写真：須永)

第16回世界大会（ソウル大会）参加申し込みについて  
2010 UIFA SEOUL

10月4日(月)から開催される韓国大会への参加申し込みが始まっています。第2次締め切り日は9月1日(水)です。参加希望の方は、冊子巻末にあります参加申し込み用紙に記入の上、EメールかFAXにて、直接大会事務局までお送りください。

Kenya Report 2

"Japan, a Friendly State"

KOMURA Nobuko

"What are you doing? Go away!" A bank officer said this to me when I was waiting for my acquaintance at the gate of the Central Bank of Kenya, Nairobi. He seemed to think I looked strange because I was in muddy clothes with a dirty bag. However, in an hour, he told me with a great smile, "Welcome to Kenya!! Kenya is a democratic and peaceful state." This is because he found I was from Japan.

I got muddy during my bus trip from a semi-arid village, the Mwingi East District. It was the beginning of the rainy season, when the roads had many cave-ins, and my bus tilted to the left and right. When the bus stopped, in darkness, I saw the silhouette of a guard, who was struggling to maintain the road using a spade.

A week before that day, I left Nairobi for the villages with the Kenyan staff of CanDo. An NGO, CanDo has been conducting various grassroots and participatory projects, such as the *AIDS Education Project for Social Building to Protect Children*, since 1998. CanDo looks at villagers and focuses on affluence based on their viewpoints. Thus, their projects include grassroots networks, and foster great interaction.

When I was welcomed by the bank officer, I felt strange, as well as relieved. Japan is one of Kenya's biggest donor states. Was I welcomed because of Japan's development cooperation, or because of the friendship between Japanese and Kenyans?

UIFA JAPON 事務局  
〒102-0083  
東京都千代田区麹町 2-5-4  
第2 押田ビル ㈱生活構造研究所内  
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866  
E-mail: uifa@LIQL.CO.JP  
発行 2010年7月15日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON  
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS  
OF QUANTITY OF LIFE  
DAINI-OSHIDA BLDG.  
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU  
TOKYO, JAPAN 〒102-0083  
PHONE :+81-3-5275-7861  
FAX :+81-3-5275-7866

■ 魅力的なリノベーション No.10 Attractive Renovations N.10  
クニハウス—自宅を“まちの縁側”に 岩間 恭子  
Intermediate Space for the Community IWAMA Kyoko

名古屋市内にある「クニハウス」は、看護師の丹羽國子さんが同僚とのワークスペースとして自宅の一部を開放したことをきっかけに、町内会の集りや近隣住民も気軽に立ち寄れる場所として地域全体に住まいを開き、人々のつながりを生んでいる場所である。訪れた方から、「ここはまるで、まちの縁側だね」といわれ、今では「まちの縁側クニハウス」と称しているが、20年以上も前からこのような活動を続けていることから、「まちの縁側」発祥の場所ともいえる。

当初は“普通の”戸建住宅の1階を開放していたが、11年前に丹羽さんが定年を迎えたことを機に、近隣の大学研究室等に協力を依頼し、1棟全体をまちの縁側として改修し、丹羽さんは近接するマンションに移り住んだ。改修により、前面道路側にガラス面を多く設け、外へ開いたつくりとなった。内部はエントランスから奥まで仕切りがなく大空間が広がっている。また、畳コーナーを設けたり、子どもの遊具にもなる鮮やかな家具を配置したり、優しい心配りが随所にみられる。

改修にあたり丹羽さんがこだわったのは、台所の床を下げ、対面キッチンをして、目線が近くなること。このこだわりから伺えるとおり、クニハウスでは誰もが同じ目線で互いを尊重することが大切にされている。特別なイベントは行わない。しかし、赤ちゃんとお母さん、お父さん、学校帰りの子ども、学生、引きこもりの子、障害をもつ方、高齢期の方、だれもが遠慮なく立ち寄り、居心地よく過ごせる場所。それがクニハウスである。

合鍵を学生や町内会長に預けて、丹羽さんが留守でも開いてきたが、現在は活動の持続性を考えNPO法人格を取得し、長年の活動によってつながった「みんな」で運営している。ここには「こちらから心を開けば、誰もがこたえてくれる」「美田は子孫にではなく、地域に残す」という丹羽さんの哲学が息づいている。  
(住宅総合研究財団研究員)



丹羽さんとクニハウス

■ 巡回展—IAWA の設立 25 周年を祝って 松川 淳子  
Planning for the IAWA Exhibition and Symposium  
MATSUKAWA-TSUCHIDA Junko

すでに何回かこのニューズレター上でご紹介してきた IAWA (International Archive of Women in Architecture) は、世界各国の女性建築家のパイオニアたちの資料を集めた他に類をみないアーカイブであり、UIFA JAPON の初代会長、中原暢子氏のパネルも収められている。今年、設立 25 周年を迎えるこのアーカイブを祝って、現在、米国では、巡回展がスタートしており、10 月には、韓国で開催される UIFA の世界大会にも巡回して行くことになっているが、その後、来年 6 月には UIFA JAPON の総会にあわせて来日することが計画されている。草創期の女性建築家たちのドローイングやノートなど、いま振り返っても貴重な資料が展示されるはずであり、楽しみに協力していきたい。



米国での巡回展 写真提供 ドナ・デュネイ教授

■ 会員の本 Member's Publication

『心に響く空間—深呼吸するトイレ』  
小林純子・設計事務所ゴンドラ 弘文堂  
Impressive Space by KOBAYASHI Junko

この 10 年ほどで、日本の公共トイレはめざましく改善された。小林純子さんの著書『心に響く空間—深呼吸するトイレ』には、その先導的な役割を担った小林さんと設計事務所ゴンドラの作品がまとめられている。商業施設、学校、街づくり、駅、ユニバーサル・デザインという項目ごとに事例を紹介した第 I 部、施主や専門家との対談をまとめた第 II 部から成るこの本は、設計者への指針であると同時に、日本のトイレ史の貴重な資料でもある。殺風景だったトイレが魅力的な空間へと変わる背後には、綿密なデータの蓄積や、施主や関係者との対話があり、単に「トイレ」と一括りにすることはできない奥行きがあることを知ることができる。そして、衛生的・機能的であることはもちろん、心理的、都市的、社会的な観点が必要なことがわかる。「トイレと階段を設計すれば、だいたいその人の建築に対する考え方がわかる」という林昌二さんの言葉が印象的だ。建築に関わるすべての人にお薦めしたい。  
田中厚子 TANAKA Atsuko



UIFA JAPON の新パンフレットとホームページ

New Flyer and Home Page: 'uifa-japon.com' <http://uifa-japon.com>

UIFA JAPON の新パンフレットが会員のお手元に届いていると思います。活用方法をご提案ください。英文パンフレットも準備中です。近々ホームページが開設されます。ぜひ訪問して下さい。

■ 役員会報告

2月24日各委員会等からの報告及び第49回海外交流の会議、ハイチ地震の支援承認他。3月26日各委員会等からの報告及び総会議案書、記念講演会協議他。4月23日各委員会等からの報告及び予算決算、記念講演会協議他。5月27日各委員会等からの報告及び総会準備協議。6月23日各委員会等からの報告及び総会の総括、UIA大会での協力協議。

■ 編集後記

この号は特別にフルカラー印刷です(古村)、それぞれの活動つないでレースワーク(田中)、アルペジオ大塚に響く小野アンナ(中野)、「レースワーク」の表記論議

を続けたい(在塚)、バルコニー、キュウリとゴーヤ、愛でながら、朝食ひと時堪能です(須永)、「ことばはとどくか」地球語を求めてとりあえず日英併記(渡辺)、丁寧言葉紡ぐメンバーの笑顔楽しい夏の夕(黒石)、I'm always empowered by the work of UIFA Japan! (K. Sevens)、講師曰く「廃棄容器でヤクルト塚ができる」(石川)、レースワークの編み目づくりを学びつつ(井出)、ソウル大会申し込み忘れずに(飯田)

抄訳担当：特記ないものは執筆者 黒石いずみ(KI) 田中厚子(TA) 中野晶子(NA) 古村伸子(KN) 抄訳監修：Karen Sevens 写真：特記ないものは執筆者